縄文・棟方志功・岡本太郎―鑑賞教育の教材化に向けて―

蝦名敦子

これまで地域の文化財として鑑賞教育の題材に取り上げてきた縄文と棟方志功に、縄文の芸術的意味を初めて公にした岡本太郎を関連づけた。そして、それらの相互の共通性について考察し、教材化の可能性について検討したものである。岡本太郎が発表した『縄文土器論』の前後に、棟方の人体表現にも新たな変化が見られ、土器や土偶の装飾に類似した文様が女体に刻まれている。縄文の芸術性を発見した岡本と、棟方が郷土の原始的な縄文の世界から現代の表現として強い創作力を発揮した点は共通していると言えるであろう。共に縄文的な芸術性を自らの芸術として現代に甦らせたのである。このような内容を踏まえながら、今後子どもたちの視点に立った教材化の検討がさらに必要になる。